

明月千里
イラスト

omaera doredake
orenokoto suki dattandayo!

OMA-DORE!

お前ら
どれだけ俺のこと

好き!
だったんだよ!

試読版 白雪編

プロローグ 覚醒の夜明け

——『恋愛脳^{れんあいのおう}』とは、あらゆる種^{しゅ}に備わった認知の能力^{パワ}である！

本能^{つかさど}を司る右脳^{うのおう}により、直感で得た恋の衝動を目覚めさせ——。

理性^{つかさど}を司る左脳^{さのおう}によって、恋心を具体化し認識させる。

自らの意識に潜在する『好き』を『発情』——もとい、

恋心として自分の気持ちに気づかせる能力。

理性と感情を区別する仕事脳とは対極に位置するこの恋愛脳が発達していなければ、いくら誰かを好きになろうとも——恋愛関係にまでこぎ着けることは叶わないだろう。

そして今、ある少年の周りにある少女たちがいた。己の才覚を信じ、抑圧よくあつされた社会の中で自らの道を貫き。

しかし、自分の気持ちには呆れるほど鈍感どんかんだった『非』恋愛脳さいじよの才女たちは、ある少年に起きた事件を境に覚醒かくせいすることとなる。

第一節 『非』 恋愛脳才女の建前

「――あしみやせんぱい 芦宮先輩。少々、お時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

暖かな五月の初旬。

放課後の教室に侵略者が攻めてきた。

元名門お嬢様学園の制服を誰よりも優雅ゆうがに着こなす一

年生。

サラサラの銀髪をリボンでまとめた凜りんとした美少女の

名は、月ノ瀬白雪。つきのせしらゆき

入学してひと月足らずで、校内の噂うわさになつた有名人だ。
端正な顔立ち、つややかな白い肌、うつすらと赤みが
かつた魔性の瞳。ましろうひとみ

トップの成績で入試を通過し、入学式の挨拶あいさつを務めた
ことは記憶に新しい。

名家の生まれである少女が持つたおやかな気品は、芦
宮隆人を圧倒する。りゅうと

後輩の美少女令嬢こうはい れいじょうが違ちがう学年の教室を尋ね、男子に声
をかける。

それだけで教室のクラスメイトたちは色めきだち、黄
色い声が上がった。



「あの月ノ瀬さんが芦宮君に？　　いったいどんな用事なのかしら？」

「芦宮君には恋人ができたばかりとの噂ですのに、まさか——これが略奪愛!?」

なんの事情も知らない女生徒たちがはやし立てるが、この事態の中心人物、芦宮隆人は困惑していた。

月ノ瀬白雪がただ可愛^{かわい}いだけの少女ではないことは、誰よりもよく知っている。

嫌な予感を隆人は覚えた。

（いったいなにをしに来た？　こいつは——）

「放課後なので大変忙しいことは存じています。おおかた先週できたばかりの新しい彼女と、この伝統ある

学園でどうイチャつくかを考えるので必死なのでしょうね」

白雪の小さな形のよい唇くちびるから、探りの言葉が紡つむがれる。上品な微笑びしょうの裏に、小悪魔のようなからかいが潜ひそんでいる。

「お前、俺おれをなんだと思ってるんだ……」

「失礼しました。いくら芦宮先輩でも、そういうことは校舎の裏とか人目のつかない場所ですますよね。ところで見つかったら停学ですよ。同じ中学のよしみで忠告して差し上げますが」

「やめろ！ 暗に俺が校内で停学必至ひつしな背徳はいとく的行為をしているような言い方は……！」

風評被害も甚^{はなは}だしい。

言われ損にもほどがある。

そして白雪の指摘は、半分が事実であり半分が異なる。隆人は先日、生徒会長に告白されて恋人になった。

しかしその一週間後に、手すらつながないまま速攻でフラれていたのだ。

ちなみに白雪というとまるでどこかのお姫様のような名前だが、実際は毒リンゴを食わされそうどころか、本体が毒^{ぶんぶん}の塊^{かたまり}のような存在である。

文武両道^{ぶんぶりょうどう}の令嬢といえ、スクールカーストでは最頂点。

あくまで平均的な高校生——いや、ちよつとだけリ

ア充方面に寄っている^{ぎょ}と装っているが、内面は陰キヤである隆人では御しきれない存在だ。

二年前——同じ中学に所属していたときも委員会で行動を共にしたときも、彼女の毒舌^{どくぜつ}には手を焼かされた。しかし高校へと進学し、この学園で再会するまでは接点もなかったはずだ。

（わからん。なんなんだ!? こいつの、白雪の目的は——）

隆人は困惑し、白雪の真意を読み取ろうとする。
が、わからない。

愛らしくも自信たつぷりな表情で、こちらを見つめてくるだけだ。

「ほら、早くついてきてください。それとも年下の女の誘いには乗れませんか？ 年上専門の熟女マイスターなのですかそうですか」

「っ……！ わかったよ！ 行けばいいんだろ！ ここまでやるな！」

好奇心でどよめく教室の空気を背に、隆人は白雪のあとに続いた。



隆人が白雪に連れられて階段を下りると、風が新緑の匂いにおを運んでくる。

どこか高貴こうきさすら感じられる古めかしさ。

あるいは奥ゆかしいともいえるアンティークなデザインの木造校舎は、この星詠ほしよみ学園が元々は歴史あるお嬢様学園だったことを示している。

時代の流れとともに少子化が進み、名家の概念も薄れ、存続のために共学と相成あいなったわけだが——その独特な校風は今も色濃く残っている。

『いわ曰く、学業の中で個性を重んじ、長所を伸ばす』
したがって、一芸に秀でた変わり者の子女しじよが自然と集まってくるのだ。

共学化し数年が経過した今も、女子に人気があるせいか男女比は一对四となっている。

隆人は校長と知り合いだった叔父おじさんに、あまり人づき合いを考慮しなくてよいという学園があると紹介され、喜び勇んで行ったら見事に騙だまされたのだ。

（こんな学園……。嬉しいどころか、女子が多くて、余計に気を遣つかうんだが？）

そんな恨み言うらごとを胸に秘めた覚えがある。

——隆人が通っていた中学校では、意識の高い連中が多かった。

イケメンor美少女。あるいは人気のスポーツが達者たっしやな者、トークができるものが階層構造ヒエラルキーの最上位に属し、陰キャたちが虐しいたげられる箱庭社会。

小学生時代。好きな子に陰口^{かげぐち}を叩かれていたところを聞いてしまったトラウマがある身として、隆人が選んだ処世術は無難ポジの確立——ようは中間層である、真面目系さわやかキャラを演じることだった。

陸上部の二番手という、他者と距離を取りつつも、見くびられない立ち位置を堅持^{けんじ}し、容姿や身だしなみにも気をつけて、それなりに充実している感じを装っていた。なお、陸上部を選んだのはチームプレイをしなくて済むからであり、隆人の外見を整えたのは従姉妹^{いとこ}の美容師である。

そのおかげか——何度か同じ学校の女子に告白されかけたこともあったが、トラウマのせいで及び腰になっ

ていた。

しかし今の学園に入って一年が過ぎた頃、恋愛^{れんあい}への欲求は高まっていたため、もうひとりの自分から突っ込みが入った。

（――さすがに俺も、たかが小学生時代の出来事を引きずり過ぎじゃないのか？）

この学園での立ち回りも慣れてきたことだし、今月の恋愛運は星五つの最高ランクだった。

とはいえ、隆人として単なる雑誌の運勢を真に受けたわけではない。

要はなんでもいい。きっかけがほしかったただけだ。人は経験を元に、人生の指針を得る。

——だが、過去に囚^{とら}われ今の行動に及び腰になるのも愚^{おろ}かなことだ。

そんなとき、都合のいいイベントが起きた。

ボランティアで行動を共にした美人の生徒会長から何故^{なぜ}か見初^{みそ}められ、つき合^{しやうだく}ってほしいと申し出られ、隆人は喜んで承諾した。

あときは天にも昇るような気持ちになり、マンションの自室で垂直跳びをしまくり真下の住人から怒鳴り込まれたものだ。

恋人のいる充実した学園生活。

過去の呪縛^{じゆばく}から解き放たれた隆人は、青春という名のイチヤコラを謳歌^{おうか}できるはずだった。

（——まあ、一週間も経^たたないうちにフラれたんだけどな！）

思い返す隆人の顔に諧謔^{かいぎやく}の笑みが浮かぶ。

むしろ無理をした笑いである。

頬^{ほお}が引きつったまま固まっている。

『夏から海外留学の予定が入ってしまいまして、すみません。お別れしませんか？』

いやいやいや！ まだ夏まで一ヶ月以上あるじゃないっすか。なんすかその見たいテレビ番組があるから今日は早めに帰りますみたいな適当な離別の理由は。

まだ会長の部屋に行って『今日は両親が旅行でいないんです』どころか初めてはレモンの味だったねどころか緊張して汗かいてるから手を繋ぎづらい……とかもないんですがそれはちよつとどうなんですか畜生ちくしょうというか思いに胸くらい揉もませろと思わず言いたくなつた隆人だったがさすがに自重じちようした。

嘘うそだ。

そんなこと言う勇氣は最初からない。思つたのはほんとだ。

要は生徒会長が持っていた隆人へのイメージが、実物とはかけ離れていたのだろう。

——とまあ、そんな感じで。

あっけなく人生初めての恋人関係は終わりを告げ――
今後はノリや勘違い、空気に流された安易あんいな恋愛は絶対にしないと、隆人は固く心に誓ったのだった。

それが、ほんのつい先日の出来事である。
しかし、どこをどうやって広まったのか。

生徒会長が美人で有名だったせいで、完全に隆人は噂話の渦中かちゅうにある。

つき合って速攻で隆人がフラれたというその事実までは広まっていらない。

だが隆人本人は、失恋のダメージから回復していない。
その現実とどう折り合いをつけようか。バイトで稼いだデート用の資金を、エロブルーレイにつぎ込んで現実

逃避してやろうかと思っていたまさにそのとき、後輩の月ノ瀬白雪が訪ねてきたのだ。

（っていうかコイツ、俺になんの用があつてきたんだマジで？）

歴史ある木造の床を歩き、渡り廊下^{ゆか}にさしかかった瞬間、隆人の意識は現実に戻る。

中学時代こそ生徒会執行部で共に仕事をしていたから、むしろ人嫌いであろう白雪の知り合いの中では、まだ親しい方だと思うが。

「どこを見てるんですか？ 発情中の先輩のことですからおおかたわたしのふとももでもチラ見していたんでしようにけど」

「ばっ……！ おまつ！ 別に見てねえよ！」

むしろ今の言葉で気になっ
てしまい、視線が釘^{くぎ}づけに
されてしまう。

すらっとしつつも、少女特有の丸みも残っているふとももは、黒いニーソックスとのコントラストで大変素晴らしい。

歩く姿勢も綺麗で、それだけで絵になっ
てしまう。

口を開けばマウントを取りたがるDSの少女だが、見た目は深窓^{しんそう}の令嬢と呼ぶに相応しいので、悔しいけど見
ちやう。

表向きが傲岸^{ごうがん}不遜^{ふそん}、ワールドイズマインの性格なので
周囲にはそう思われ
ないようだが、意外と気遣いもでき

て優しいところもあるのだ。

というか、今頃気づいたが、先を歩く白雪は時折隆人の方を振り返り、チラチラと視線を送っていた。

（なんだ？ あの視線は。さつきから俺の反応を気にしているような――）

はっ！ と、隆人は息を呑む^の。

（アイツ、この前のことを根に持っているのか……!?）

数日前のこと。

廊下にて白雪から教材の荷物運びの手伝いを頼まれたとき、生徒会長とつき合い始めたことを自慢^{じまん}してしまっただのだ。

（このまま俺が速攻でフラれた一件をここで暴き、マウ

ントを取ろうとしてきているのでは!?)

隆人は少女の意図を想像し、^{あせ}焦る。

白雪としてはからかい半分の仕返しだとしても、今の隆人にとっては致命傷となる。

『もしかして、ほんとにもうフラれたんですか？ あれだけわたしに自慢をしてきたというのに——。お気の毒様ですね』

「うぐっ！」

脳内に浮かんだ白雪の幻影が、^{あざけ}嘲るような笑顔で心をえぐってくる。

呼吸が乱れ、うめき声がかすかに漏れた。

（——い、いかん、それだけはなんとしても避^さけな

くては！ 俺の心が死んでしまっ！）
恐怖に怯える隆人は、これっぽちも気づいていなかった。

普段絡^{から}んできてはマウントを取ろうとしてくる白雪自身——つい最近まで本人ですら気づいていなかった現在の真相に。



少女は高鳴る鼓動を抑えながら、背後を歩く隆人の顔を振り返りチラ見する。

その頬は、期待と昂揚^{こうよう}でかすかに朱に染まっていた。

（ふふ……。突然連れ出されてドキドキしているようですね。わたしとふたりきりになる状況でその反応は、とてもいい感じですよ。はあ、うまくいつてよかったです……）

長い廊下の先を歩いていた一年生の才女さいじょ——月ノ瀬白雪は安堵あんどに胸をなで下ろし、隆人の想像とはまったく別のことを考えていた。

普段は堂々と振る舞っている白雪だが——こう見えて、慣れないことに関しては割と小心者である。

むしろその小心を隠すために、普段から毅然きぜんとした態度で武装しているわけだが、その真の姿を知るものはほとんどいない。

わざわざ二年の教室まで飛び込むのは、かなりの勇気を要した。

白雪がそこまでして、隆人に声をかけたのにはわけがある。

中学時代。

たまたま委員会が同じだった白雪は、隆人と接する機会があった。

当時から自分を守るためにガードを固めていた白雪だが、『ある出来事』に関しての、隆人の行動を見て、つき合うちに足る人物だと判断した。

当時から周囲に人は多かったが、対等と認めた者などいなかった白雪が、勝手に友人認定していた。

生来^{せいらい}のプライドと、自らの本心を隠すために塗り固めたスタイルで生きていた月ノ瀬は、隆人をさりげなく^{ちようほう}重宝して仕事を与え、側に置いていた。

隆人の友人たちは面倒を押しつけられていると災難に思ったようだが——白雪としては信頼し、自分なりに好意を示していたつもりだった。

が、恋愛感情を持っていたかといえそうではない。自分にはもつと相応しい者がいるはずだ。

名家の令嬢であることを自覚し、自分のやるべきことと、やりたいことを模索して生きていく中で、漫然^{まんぜん}とそう考えていた白雪だったが——。

それはただ、本心に気づいていなかったただけだと思い

数日前。

星詠学園一年生の教室にて、白雪はある噂話を聞いた。

「ねえねえ知ってる？ 二年の芦宮先輩って」

「見た目はそこそこいいよね？　この学園だと恋人は作りづらいから、彼女いないのかもしれないけど」

（——ふふ。あの人がそんなにモテるわけないじゃないですか。——見さわやかキャラですが、奥手な頑固者（がんこもの）です。）

一年生の教室でそんな噂を聞きながら、内心白雪は鼻

で笑ったものだ。

（それに、何故か知りませんが女の子にそこまで興味はないようですし。完全無欠のわたしにも告白ひとつしてこないのですから、他の女になびく道理なんて）

「それが、もうつき合ってるみたいなのよ。生徒会長に告白されてOKしたって——」

「え————っ!？」

我を忘れて叫んだ瞬間、教室の時間が一瞬止まったことを、白雪は覚えている。

三秒後、何事もなかったように着席し、周囲の会話に耳をそばだてた。

（ま、まさか、そんな……。生徒会長みたいなミ——ハ——

が、芦宮先輩を好きになるわけが——）
そう思い込もうとしたが、どうやら噂に間違いはないらしい。

まだ信じられなかった白雪は、本人に直接問い正すことにした。

授業の教材を運ぶ役目を買って出たあと廊下で待ち伏せ、あたかも偶然会ったフリをして隆人に手伝いを頼み、話す機会を得た。

「別に構わないけど。一年で手伝ってくれるヤツいないのか？」

「独り身の寂^{さび}しい学園生活を送っている先輩にサービス

ですよ。わたしのような年下の美少女に声をかけられることなんてありえないんですから」

からかうように白雪は言っただが、隆人は余裕の笑みを浮かべていた。

「ま、つい先日まではその通りだったけどな。もう俺にも恋人ができたんだぜ？　悪いな白雪、先を越しちまつて」

「……………」

ピキッ！　と、告げられた白雪は真顔のまま石化。

隆人に対し、常に対等以上の関係を持ってきた（と一方的に思っている）白雪の中で、築き上げてきた牙城^{がじょう}が崩壊する音が聞こえた。

そして、両手で抱えていた教材の辞書を取り落とし、その角が足の小指に命中した。

「いったあっ！」

肉体と精神へのダブルショックで一瞬涙目になった。

「お、おい大丈夫か？」

隆人が真剣な顔で、立ったままうつむく白雪に声をかける。

（……えっ、そんな。嘘ですよね？ 先輩に恋人ができ

たなんて、そんな予兆^{よちよう}、全然——）

内心、汗がダラダラとしたたり落ちるパニック状態だが、そこは腐っても一流の才女である。

演技という仮面をかぶることなどお手の物だ。

少女はすぐに微笑を作り、さらりと髪をかき上げる余裕の態度で迎え撃った。

「ええ、驚きました。——で、今期はどんな嫁^{よめ}なんですか？」

「いや、アニメで好きなキャラができたよって話じゃねーからな!? しかもフルごとに変えてるミーハーじゃねえかどんだけだよ俺は！」

隆人は引きつった顔で突っ込む。

「まあ、蓼^{たで}食う虫もなんとかと言いますからね。——

ところで先輩はどんな虫に好かれたんでしょうか？」

「人だよ！ だいたいそれはただのことわざだろうが!?」

「こちらもただの比^ひ喩^ゆですよ。悪い虫がつくというじゃありませんか」

「俺はお前のひとり娘かつ」

と、怒^ど濤^{とう}の勢いで言葉を投げ合ったあと、隆人は周囲を確認しつつ、声を落として白雪に告げる。

「まだ誰にも言っていないけど、うちの生徒会長だよ。お前も知ってるだろ？」

「……ッ!？」

かぶっている余裕顔の仮面にビシツと亀裂^{きれつ}が入り、白雪は呆然^{ぼうぜん}としかける。

直接当人から伝えられたことで、信憑^{しんぴよう}性が増したのである。

（なんで、なんでなんですかつ!? いえ、ここはまだ、先輩の一方的な勘違いとか思い込みという可能性もつ！）

崩れ落ちそうな両膝に力を入れ、なんとか堪える。

「ふ、ふふ……。先輩、勘違いしてはいけませんよ。生徒会長は優しい人なんですから、大方落とした小銭を拾ってもらった際に手でも握られたただけなんでしょう?」
「俺をレジ打ちのお姉さんに恋するレベルにまで落とすんじゃない。いや、ほんとだって、メールにも履歴残ってるし」

隆人は取り出したスマホの画面を、白雪に突きつける。
そこには『告白を受け入れてくれて、ありがとう』と

いう、生徒会長からのメッセージの履歴があつた。

(……………)

白雪は真顔になり、全身が真っ白な灰になつた錯覚^{さつかく}を抱く。

「……生徒会長、人には言えない罪を犯していたんですね。きつと先輩に脅^{おど}された挙げ句その告白を強要されて——かわいそうに」

「何故そこまで現実を否定する」

死んだ表情で呟^{つぶや}く白雪に、隆人は呆れ顔^{あき}で突っ込みつつ、

「そんなに羨ましい^{うらや}のか？ それとも——もしかして、実はお前も俺のことが好きだったとか——？」

「……じよ、じよ冗談は顔だけにしていただけですか？ そんなわけがないでしょう！」

なんとか仮面をかぶり直した白雪は、プイツとそつぽを向いて否定する。

「わ、わたしにとってせいぜい先輩は、使い勝手のいい知り合いというくらいのもんです。猫^{ねこ}でいうなら手を借りるくらいの評価です」

「それは俺を直接的にデイスってると受け取っていいのか？」

ほぼ役に立たないという意味だと、隆人は受け取ったようだが、

「なにをおっしゃいますか最大限の賛辞^{さんじ}ですよ！ 猫の

価値はほぼ肉球にあるようなものじゃないですか」

「それも偏^{かたよ}った感性だけどな！ 猫がかわいそう！」

が、論点はそこではない。

白雪自身錯^{さくらん}乱し、なにを話しているかよくわからない。

「ま、まあ、確かに一定の信頼は置いていたかもしれないが。このわたしから恋愛の対象として見られていたと思ったら大間違いですよ……っ！」

びしっと人差し指を立て、白雪は動揺を隠し虚^{きよせい}勢を張る。

「そうか……。ま、そうだよな」

心なしか、がっかりしたような声^{こわね}音の隆人に、内心白

雪は焦った。

「先輩がわたしをいやらしい肉欲の対象として見ていたのは間違いないでしょうけど」

「人聞きの悪いことを人目のあるところで言うな」

廊下を行き交う少女たちが、疑わしげな視線を隆人に向けている。

実際のところ、どうだったのかは、白雪も定かではない。

しかし目もくらむような美少女が、側にいるようにさりげなく仕向けていたら、一種の期待を持つくらいは不自然ではないはずだ。

隆人が過去のトラウマから恋愛に関しては慎重しんちようになつていたことと、白雪が恋愛に興味がないと思っていた隆

人の内心など、白雪の立場からは知る由もない。

「ま、最近の俺は機嫌がいいからな。失礼なことを言われても流してやるよ」

教材を運び終えたあと、倉庫の前で隆人は呟く。

その口元には勝者の笑みが浮かんでいた。

「ふ、ふふ……見物ですね。女性の靴下くつしたがめちやくち

や好きな先輩の異常性癖せいへきに、どこまで生徒会長が耐えられるか——」

「なんで俺の異常性癖がお前の中でデフォなんだよ！

あとなんで俺が靴下好きなことを知っている!？」

「では、失礼します。手伝っていたただきありがとうございます」

隆人のボケはスルーされ、ぺこりと一礼して白雪は立ち去った。



なんとかその場は乗り切った。

——が、少女に芽生^めえ^ばた胸の痛みが消えることはなかった。

というかその後、意識がもうろうとして千鳥^{ちどり}足^{あし}になり、保健室に寄って早退した。

ふらつきながらも自宅へと帰り、体調不良を侍女にメールで相談したところ、

『それはひょっとして、失恋のダメージなのでは？』
という返信があり、白雪は立腹した。

「はあ？ ふざけないでください。わたしは真剣に病気で苦しんでいるんです……！」

ベッドの上で横になりながら白雪は声を上げて反論したが、翌日以降も隆人とすれ違う度にモヤモヤに苛まれ、さいな自覚するしかなかった。

（なんということですか。このわたしが……先輩を好きだったなんて！ このわたしに自覚がなかったばかりに！）

既に遅かった。

自分の気持ちに気づけなかった『非』恋愛脳の白雪は、

泣く泣くこれからの学園生活を送るより他なかつたのだが――。

隆人が早々に生徒会長からフラれたことを知り、白雪は立ち直った。

失恋の直後は、精神的に弱まっている。

これは怪我けがの功名こうみょうであると思った。

「ふふ、可愛い才女の後輩であるこのわたしが声をかければ、即オチ二コマも同然でしょうね」

『あの、水を差すようで恐縮なのですが――』

と、後日再び、侍女からのラインメッセージが届く。

『お嬢様はあのあと、隆人様に恋愛感情などないと伝えてしまったのでは？』

「……………」

自室にて、寝間着姿で髪をかき上げたまま、白雪は固まった。

当たり前前の話だが、白雪がそう隆人に言ってから、まだ数日も経っていない。

「なんでわたしはそんなこと言っただんですか!? わざわざ直接、本人に！」

『知りません。お嬢様のプライドが無駄に高過ぎるせいではないでしょうか?』

侍女は慣れた態度で応対する。

『あれは嘘だったと言えはいいいじゃないですか? 強がってすみませんでした本当はあなたが好きだったんです』

と』

「そんなみつともないこと言えるわけないでしょう!? 常識的に物事を考えてください!」

『失恋したと自覚しないで早退した方が、遥^{はる}かにみつともないと思うのですが……』

淡々と呟く侍女の言葉を白雪は無視し、考える。

「どうすればいいのかしら」

今が隆人をモノにする絶好のチャンスであることに間違いはない。

だが動き方を間違えれば、白雪は自らのアイデンティティを失うことになる。

勉学も運動も、家柄^{いえがら}も容姿も——後輩でありながら

全て上回っていた自分が、今後逆らえない決定的な弱みを晒^{さら}すことになってしまふのだ。

もし仮に、隆人にそれが知られたとなれば――。

『そうか、悪かったな白雪。お前の気持ちに気づいてやれなくて――。お前、そんなに俺のことが好きだったんだな』

などと、さわやかな笑みで言われてしまふだろう。

「つて……誰がですかっ!? 勝手に思い込まないでください！」

隆人からそうニヤニヤとした笑みで告げられる想像をただけで、恥ずかしさが炎となつて顔面から吹き出る。はあはあと息を切らした直後、白雪は我に返り、考え

る。

今まで保ってきた体裁が消失し、一気に自分の格が地に落ちてしまう。

万が一隆人とつき合うことになっただとしても、永劫^{えいこう}そのことでいじられてしまうだろう。

そんな屈辱^{くつじよく}には耐えられないのが白雪という少女なのだ。

（わたしから気持ち伝え直すなんて絶対に無理——
けど、この機会を逃すわけにはいかない）

一晩中悩んだ末に、白雪はその知能を総動員し、答えを導き出した。

まずは自分の力を最大限発揮できるフィールドへ、隆

人を引きずり込むのである。

真実を明かさぬまま、隆人を落とすために。



そんな白雪の考えなどつゆ知らず、隆人は疑いの眼差しを白雪の背に向けていた。

（やはりこいつ、俺の失恋を知って、前回自慢した俺をからかう気なのか……？　だが、既にここまでついてきてしまった以上、どうやって逃れれば——）

特別校舎へと続く、吹き抜けの渡り廊下に人影はない。この辺りが、処刑場としては適切ではないかと、隆人

は震え上がった。

時折僅かに振り返る白雪はかすかに頬を染めていたが、隆人の視点からは欲情したサディストの笑みにしか見えない。

隆人は胃が痛むようなプレッシャーを受けるが、その苦しみから逃れるために、脳の一部が快楽物質を分泌した。

（待てよ。ひょっとして逆の可能性もあるんじゃないか？ 俺が会長と別れたことを知って、わざわざアプローチをかけてきたのだとすれば――）

隆人は突如、ポジティブ思考に覚醒する。

極限のストレスに晒された防衛本能による妄想だ。

（ふ……。可愛いところあるじゃないか。やはり俺が會長とつき合ってしまったことが、ショックだったようだな！）

『わたし、自分の本当の気持ちに気づいたんです。実は先輩のことが――』

もじもじと上目遣いで見上げてくる白雪の姿を脳裏のうりに浮かべる。

常にマウントを取ってくるドSな性格のせいで周囲は敬遠けいえんしているが、外見は百二十点をつけられるほどの美少女で、文武両道のパーフェクト・ガールである。

くびれのあるスレンダーな体つきだが、胸はブラウスとブレザーを押し上げるほどでかい。

仮にそんな彼女がデレたとしたら——これ以上の破壊力は存在しないだろう。

（いや、まったくあり得ない話でもないしな……）

恋愛感情などないと以前の白雪は言っていたが、中学時代に彼女の側に誰より多くいられたのも隆人ひとりなのだ。

傍^{はた}から見ればドン引きするような隆人の現実逃避だが、奇しくも今回に限っては当たっていた。

隆人がそんなことを考えつつ、そつと目を伏せた、そのとき。

「——好きです。つき合ってください」

意外な声が聞こえて隆人は目を開けた。

が、言ったのは少し前を歩いていた白雪ではない。

というか、発言者は星詠学園の少女ですらなかった。

年齢的には隆人と同い年くらいだろうか？ 見慣れぬ

他校の制服を着た少年が、白雪の前に立っていた。

（なんだ？ 白雪は、このために俺を呼び出したのか

——。いや、違う。ただの偶然か）

どうやら学外からやってきた少年が敷地内に入り込み、

白雪に告白をしてきた。という状況のようだ。

突然の出来事だが、少年の顔立ちも悪くはない。

じやっかん

若干全体の雰囲気からチャラさを感じなくもないが、

それは隆人の主観によるものかもしれない。

少なくとも外見印象のみで評価するならば、それなりのランクの男だと思われたが。

「なんか言われてるみたいですけど。どうするんですか、先輩？」

白雪は真顔で、少し背後で足を止めていた隆人を振り返った。

「……違うだろ!? お前が言われてるんだよ！ なんでアクティブな男ホモセクシャル好きの男に俺が告白されたと思っただ!?」

「そうなんですか？ ええと——あなたとは初めまして、ですよネ？」

白雪は丁寧^{ていねい}だが、さらりとした声音で対応する。そこそこのイケメンである他校の男は、肩すかしを食らったように戸惑った。

「え……ま、まあ。そうだけど、一目惚れなんだよ！登校中にキミを見かけて、噂を聞いてさ——」
「わたしのことなどにひとつ知らないのに、好奇心で？　それでいきなり告白ですか。気が早いことですね」

白雪の口元に緩やかな弧が描かれる。つき合いがあつた隆人にはそれは微笑というものでなく、呆れた笑みの類だと知っていた。

（怖っ……！　さつきしていた俺の甘い妄想が崩れてい

く……！）

が、告白してきた少年は、この時点で、既に敗北していることに気づかなかった。

「これからお互いを知っていければいいと思ってさ。今の時代、お友達から始めるなんて古過ぎるぜ」

「そうですか。では、わたしのことを少し教えて差し上げます」

白雪はキラリと目を光らせて、自信たつぷりに腕を組む。

続いて少年を指さした。人を指さすなと教わらなかつたのかと隆人は言いたくなつたが、どうやらわざとのようだ。

「あなたは——とても『恋愛脳』が発達しているのですね」

「は……？」

唐突な白雪の指摘に対し、少年は目を丸くする。

「生物が発情する機能のことですよ。節操せつそうのない即物的な恋愛に励んでは一喜一憂いつきいちゆうし、自分を異性にアピールする努力だけは事欠かず、やれSNSでバズることしか考えていない、発情期のケモノみたいな存在。底の浅さが透けて見えるようです」

あまりに自然な口調なので、侮辱ぶじよくされているということにも、相手はすぐに気づけなかつたようだ。

「整髪料と香水のつけ過ぎで装飾過多です。一見、女性

と話をする勇氣があるようで、実際のところせせこましくてこすっからいです」

「いゝいや待てよ！ 人は中身が大事だろうが!? 外見の第一印象で判断するのは――」

「初対面では外見で中身の人格まで判断されるというのが社会の常識ですよ。そもそも内面というのは無意識に外にまで^{にじ}滲み出してしまふものです。実際のあなたも軽薄でだらしなさそうですね。それを言うなら今回わたしにいきなり告白してきたのも第一印象が全てではないのですか？」

すらすらと、涼しげな表情で白雪は言葉を羅^{られつ}列する。

「……ぐ、う、あ」

あーあ。という感じである。

この手の光景は中学時代に何度も隆人は見てきている。
むしろ、白雪の噂——『恋愛嫌い』を知っている人間ならば、^{あんい}安易に告白しようなどと考える方がおかしいのだ。

白雪が明るい笑顔で、堂々と胸を張っている。

中学より成長しているようだが、ガン見がバレたら怒られそうなので目をそらす。

「——で、あなたはなにか、人に自慢でできることはあるのでしょうか？　どんな知り合いがいますとかではなく、あなた自身のことです」

もはや、オーバーキルだ。

名も知らぬ他校の少年の顔からは自信が消え失せ、死刑宣告を受けたように青ざめている。

（やっぱ怖っ……！　やはりコイツに傷口をえぐられるのはダメだ……。これから俺をもなぶる気だったら死ぬ！）

改めてその切れ味を見て、隆人はビビっていた。なので、白雪がおどおどした様子で、隆人の反応をうかがっていることに気づかなかった。

「く、うぐぐ……！」

直後、他校の少年の怯^{おび}えた瞳に、ギラついた叛^{はん}逆^{ぎやく}の意志が宿る。

追い詰められた獲物を取る行動は二択である。逃走か、

抵抗か。

この少年は後者を選んだ。奇しくも白雪の指摘した通り、もっとも頭の悪い方法で。

「うっ、うるせえええ！　ちよつと可愛くて金持ちでス
タイルもよくて勉強も運動もできるからって調子に乗る
なあああ……！」

……いや、完全無欠じゃねえか。

なぜ戦いを挑いどもうなんて思ったんだよ。

などと隆人は瞬間的に突っ込みつつ、両手を上げて白
雪につかみかかろうとした他校の少年を見てはつとする。

「——白雪！」

隆人がとっさにかばおうと走り出すよりも速く、白雪

は自ら男の方へ進み出る。

少年の伸ばした右手をつかんで、くるりと背を向けて反転し、そのまま相手の勢いを利用して投げ飛ばした。

「ぐっ、おあっ……！」

ドズツと、少年は背中から、渡り廊下と少しずれた地面の上に落ちる。

コンフリートには落とされなかったが、それでも相当なダメージなのだろう。意識こそ失ってはいないが、戦意は完全に尽きていた。

「お、おい。大丈夫か？」

「ご心配には及びません。先輩もご存じでしょうが、わたしは祖父から古武道を教わっておりましてので、余裕

です……！」

白雪は髪をさらりとかき上げて、満足げに頷いたが、
「お前じゃなくて、やられた方な！」

「……」

隆人のそんな声を聞くと、白雪は半目^{はんめ}で片頬を膨らませた。

「そんなことより救助が遅いですよ。先輩は大方わたしが手込めにされそうになるのをチラ見して、妄想の中で欲望の捌け口^{はぐち}に使おうとしていたんでしょけど」

「いや、助けるまでもなく一瞬で終わってたし！　って
いうか人聞きの悪い言い方はよせ！」

「別にいいですよ。助けようとしていたただいたことは感

謝します」

くすりと笑みを浮かべながら、やってきた警備員に少年を引き渡す。

白雪はちゃんと気を遣って投げていたのか、幸いにも怪我はなさそうだ。

まあ、別の意味でトラウマにはなるだろうが。

そう思い、隆人は深々とため息をつく。

その一方で、白雪はまったく別のことを考えていた。



（失敗したあああ。とっさに手が出ちゃったけど、もう

少し待って先輩に助けてもらえばよかったのに……。わたしのばかり！）

白雪は内心涙目になって、自分の行為を悔やんでいた。偶然侵入者の男が告白してきたとき、きっぱりと拒絶の意志を示したことはわけがあつた。

（ですがまあ……。先輩の前で、あれだけ強く他の男性には興味がないことをアピールしておけば、さすがにわたしの気持ちに気づくでしょう！）

ふふ、と口元に小さな笑みを浮かべ、白雪は満足げに目を伏せる。

なお、隆人がそのやりとりを見て、これからの公開処刑に恐れおののいていることなど想像もしていなかった。

ただ、少年の怒りを買ってしまったので、さすがにやり過ぎたと内心反省する。

しかし、白雪にとって、ふたつほどいいこともあった。

（――けど、先輩が無事でよかったです）

ほっと胸をなで下ろしながら、隆人の横顔を見て頬を染める。

（ちゃんと、わたしを助けようとしてくれましたし。頼りになりますね）

なお隆人は白雪に対する恐怖から、目を合わせないように顔を背けていたが、それを見て白雪は微笑^{ほほえ}む。

（ふふ。先輩だったら、もうわたしのことを意識し始めて

いるようですね。照れて顔を見せたがらないなんて——)

内心ドキドキしながらも、これからの展開に胸をときめかせた。

ふたりの壮大なすれ違いは、まだ始まったばかりである。

第一節 月ノ瀬白雪の秘密

その空間は白昼夢はくちゆうむのようにどこか非現実めいて、同時に懐かしい雰囲気なつがした。

学園特別棟の最上階最奥に位置する天文部の部室は、歴史ある書斎しよさいを思わせる造りだった。

絵画が飾られたクリーム色の壁と、分厚い本が収められた書架しよか。

かすかに色あせた赤絨毯からは独特の香りがする。中央にある古びたソファーと長テーブルは、学園の歴

史すら感じられた。

「ようこそ先輩。^{せんぱい}我が第二天文部へ」

「ん？ ああ……」

……何故^{なぜ}に第二？

という疑問すらすぐには浮かばず、微妙^{びみょう}に間の抜けた

返事を隆人^{りゅうと}がしてしまったのは、ノスタルジーなこの部

屋の空気に酔っていたせいだけではない。

既^{すで}に生徒会長と別れたことを白雪^{しらゆき}から追及^{ついぎゆう}されるところ

っていただけに、謎の状況に肩すかしをくらったのである。

る。

「なにを惚^{ほう}けて突っ立っているんですか。部活仲間に

挨拶^{あいさつ}くらいしてください」

「えっ？ ん……？」

白雪が呆れた^{あき}ように指摘した通り、その部室にはふたりの人間がいた。

ひとりには幼さの残る顔立ちの、大人しい茶髪の少女で、どこか小動物めいた空気をまとっている。

もうひとりにはスラッとした細身の女性で、スーツの上に袖を通さず白衣を羽織っているようだが、机に突っ伏している^{ふち}ので顔はわからない。長髪のストレートが、机の縁^{ふち}から垂^たれている。

茶髪の少女は何故か隆人からさりげなく目をそらし、机の上の本に視線を落としている。

目を惹くような美人というわけではないが、地味かわ

いい。

思いの外胸もあるらしく、硬いブレザーの上からでも、膨らみの大きさは見てとれた。

「はあ、先輩は顔や名前より先におっぱいのサイズで女性を覚えるんですか？ どうせ彼女のこととも脳内でF力ツプのメスだとしてしか認識していかないのでしょうか？」

「くっ……！」

白雪が呆れた半目^{はんめ}を作り、男の本能という弱みに切り込んでくる。

（何故俺^{おれ}の視線が的確に読まれたんだ!? ……いや、わかってる。相手が俺から目をそらしてると思ったので余計にガン見してしまった……!）

「つて、勝手にサイズを教えなくてください月ノ瀬さん——！」

涙目になつて読書中の少女は顔を上げる。

「そう思うなら自分から名乗ることですね。仮にもこの人は先輩ですよ」

仮という言葉に若干^{じゃっかん}の引っかかりを隆人が覚えている

と、少女が挨拶してくる。

「うう……、愛河^{あいかわ}、真名^{まな}です……。一応、月ノ瀬^{つきのせ}さんと

同じクラスで」

なかなか^{すなお}に素直で無垢^{むく}な少女らしい。白雪のセリフに

反応すること、答え合わせになつてしまった。

一年生の五月時点でFカップならば、前途有望だろう。

隆人は図らずとも有用な情報を得たわけだが、
（しかしまずい……！ このままでは初対面にもかかわ
らず、俺がただの巨乳マニアだというレッテルを貼られ
てしまう……！）

白雪から更なるマウントを取られてしまうことを警戒
した隆人は、そうはさせるかと冷静に反論した。

「そういうお前はどうかんだ？ まさか同級生の秘密を
バラしておいて、自分は安全なところに雲隠れするわけ
じゃあるまいな」

「……ッ!?」

不敵な隆人の指摘を受けた白雪は、頬ほおをかすかに染め
て押し黙る。

困ったような、戸惑ったような表情を見せかけ、押し殺した。



（まったく、わたしというものがあら……。そんなにもあの子の胸が気になるんでしょか……。？）

同級生の愛河真名に視線を奪われていた隆人を見て、白雪は嫉妬から思わず口を挟んでしまったわけだが――、いきなりカウンターを受けて困惑した。

実際、白雪のバストサイズは年齢的に全国の平均値をゆうに上回っており、どちらかと言わなくとも大きい部

類である。

——が、ここでは愛河真名という上位の比較対象がいる。

若干だが、自分より上だ。

このままでは白雪は恋愛対象れんあいとして、隆人に弱みをさらけ出すことになる。

『——ほう、白雪のサイズはそれくらいだったのか？

俺の手に余るどころか、軽く収まってしまうかなあ？』

白雪の脳裏のうりに浮かぶのは、勝ち誇った隆人が嘲笑あざわらつてくる姿だ。

（な、なんということを考えるんですか、この人は……!?）

白雪が隆人に対して持つ、勉強、運動、家柄いえがら、容姿というあらゆるアドバンテージを、バストサイズという一点を狙い、崩しにきた。

もしこのまま白雪が隆人に気があることを伝えてしまえば、胸が隆人から見て物足りないのにつき合ってもらうという弱みをさらけ出すことになる。

たとえば茜色あかねの夕日が照らす、放課後の窓際で――。

『すみません先輩、胸が小さくて……。こんなわたしでもいいんでしょうか？』

『ふっ、俺は気が長い方でな。少し物足りないが我慢だ。じっくり大きく育つまでつき合ってやろう――』

（あああああああつ……！ いやあああああああ
つ……！）

ワキワキと楽しげに両手の指を動かす隆人の幻影に、
白雪は顔を真^まっ赤^かにし脳内で悶^{もだ}える。

そんな恥ずかしいシチュエーションを、今後つき合う
ことになった際に強要されてしまう！

とてもではないが、白雪のプライドが耐えられそうに
ない。

（ですが、ここで逃げるわけにはいきません……！）

一方的に部員のサイズを暴露^{さいうじよ}しておきながら逃げれば、
それこそ白雪の——完璧な才女^{さいじよ}というアイデンティテ

イは失墜^{しつつい}する。

もはやこの天文部において、□先だけの卑怯者^{ひきょうもの}となり果てる。

そんなこともまた、誇り高い白雪は我慢ならなかった。
よって、名家の令嬢^{れいじょう}は戦いを選ぶ。

隆人と差し違える覚悟の勝負に打って出た。

「別に雲隠れする気などありませんよ。では先輩――
わたしはどのくらいだと思いますか？」

「なッ……!？」

からかうような笑みで、あえて自信たつぷりに、白雪
は前屈^{かが}みの姿勢を取った。



両手を腰の後ろに回し、自らの胸を強調するポーズに加え、上目遣いの視線は挑発的で——相当な破壊力を生み出していた。

隆人から見て、改めて、思ったよりでかい。

というか、かわいい。

キツチリと乱れなくブレザーを着込んでいながら、あの意味裸よりも蠱惑的だ。こわく

そんな白雪の姿に見惚れながらも、隆人は逆に戸惑った。

（こいつ、こんな荒技で反撃してくるとはっ……っ！）

白雪の胸のサイズという秘密をあえて語らず、男である隆人の裁量に委ねる。

仮に小さい予想をすれば、それよりは大きいと言い張ってくるだろうし、大き過ぎれば非現実的だと流される。どちらにしろ、一年生部員の愛河真名という立派な基準に満たない事実が晒さらされることは回避できる。

一見すると逃げの一手だが、他者に判断を委ねることで勝負をしづらくする。

ましてや隆人が自己紹介をするという今の状況では、あんな安易に踏み込むことはできない。

（ダテに名家のお嬢様ってわけじゃないな……。すぐにここまで頭が回るとは——）

才女である白雪の知力と闘争心に改めてうなりつつも、隆人は反撃の態勢を整える。

キツチリとブレザーを着たままでも妙に艶めかしい体勢の白雪をまじまじと見つめつつ、唇の端が緩むのを堪える。

そして、言った。

「どうやら、実際はだいぶ控えめなようだな。その自信のなさ――」

「そう思いますか？　こう見えても着やせするタイプなんです、まあ先輩がそう思うのでしたら、ご想像にお任せします」

おそろおそろ隆人が尋ねると、白雪は後ろで組んでい

た腕をほどき、くすりと勝利を確信した微笑^{びしょう}を漏らす。
「だが、そこまでして頑なに隠すということは、大方詰
め物でもしてるんじゃないか？ 元がよほど小さいのか
もしれないな」



「なっ……！」

不敵な笑みで放たれた隆人の言葉に、白雪は動揺する。
秘密を堅持したことを逆手に取られた。

白雪が自らバストサイズを明かさないということは、
逆に言えば根拠^{あなど}のない侮りを否定する手段もないのだ。

そして、白雪はこの手の侮辱^{ぶじよく}に黙っていられない性質である。

（く……！　わたしが、この胸だけしか取り柄のない女より下だと——先輩はそう言うつもりですか？）

ふたりのやりとりを見て困惑している真名を横目で見つつ、白雪はかすかに下唇を噛^かむ。

他人に陰口^{かげぐち}を叩かれるのは慣れている。

それを聞き流し、一笑に付すことも余裕だった。

しかし、隆人に対してだけは、パッド入りだと舐められたままではできなかつた。



「あ、あの……ところで自己紹介の件はどうなったんでしょうか？」

Fカップを初対面の男子生徒にバラされるという羞恥しゅうちプレイを受けた一年女子の真名が、何故か火花を散らし、
いる隆人と白雪を見つつ困惑している。

なお、声をかけられたもうひとり——教師らしきス
ーツの女性は机に突っ伏したままである。

よくよく見れば机との接地面にクッションがあり、完
全に熟睡しているようだ。

「あの、先生、ちよつと……」

真名が不安げに呟つぶやき、ゆさゆさとスーツ姿の背を揺す

るが、

「……うるさい。ほっとけあんなヤツら。眠い」

一瞬だけ体を起こすと、ダルそうな返事をしてすぐさま机と接着した。

黒髪の長い髪を持つ、なかなかの美人だが、どうやらかなりフリーダムな教師のようである。そしてだらしない。

が、この『教師』という存在を互いに改めて認識したことにより、隆人と白雪の戦いは、新たな局面を迎えた。



「そうですか。そこまでわたしのバストサイズを疑うと
いうのでしたら仕方ありません。—— 試しに触って確
かめてみてもいいですよ？」

白雪は先ほどと同じ姿勢になり、悪戯いたずらな笑みを浮かべ
て距離をつめる。

「なっ……!?」

ここで白雪は賭けに出た。

あえて胸を揉もませる選択肢を提示したのだ。

白雪にとっても身を切る駆け引きだが、勝算はある。

隆人として、この状況で公然と後輩こうはいの胸を揉みにいくわ
けにはいかないだろう。

ここには今、女子部員の他に『教師』がいる。

いかにやる気なさげとはいえ、目の前のセクハラを
看過^{かんか}するわけにもいかないはずだ。

健全な中高生男子にとっては抗いがたい誘惑だろうが、
この状況で隆人がおさわりを実行するのは極めて至難で
ある。

そして万が一——たとえ直に確かめられたとしても、
白雪は勝つ自信がある。

真名に負けず劣^{おと}らずのバストサイズであり、パツドな
どとは無縁^{むえん}であることが証明される。

（そのときの対策も完璧です。『冗談だったのにひどい』
と涙ぐんで、先輩に責任をとってもらいましょう。まあ、
恋愛方面にはヘタレな先輩のことですから、百パーセン

トありえないでしょうけど……！）
内心ドキドキハラハラしつつも、白雪は勝利を確信した笑みを浮かべていた。



「くっ……！」

白雪の挑発だということは理解しているが、これでは隆人も手が出せない。

仮に初対面の後輩と教師の前でなくとも、ここでわざわざいくのは不可能であっただろう。

だが、隆人としてただで敗れるわけにはいかない。

ギリギリまで取られたマウントを押し戻そうと、五指を開いた両手をゆっくりと突き出す。

触るフリ——白雪の胸に限りなく自らの手を近づけて脅すことで、彼女を撤退させる手段に出ようとした。

（どうだ!? きよせい虚勢を張ったところで、実際に触られるのは嫌なはずだろ？ さっさと『さっきのは冗談です』と言って逃げるがいい！ そうすれば——やはりパツドの容疑をかけておける！）

一筋の汗を額から流しつつ、隆人はあくまで強気に迫る。

対する白雪は若干ドキリとした様子を見せつつも、その場から逃げ出さずにかすかに目をそらす。

その仕草を見て——隆人は戸惑った。

（待てよ——。何故逃げない？ あれだけ気位きぐらいの高いこいつが、いくら自分の格を保つためとはいえ、俺におっぱいまで揉ませるといのか……？　そこまで意地を張るか？）

それは隆人が中学時代から知っている、月ノ瀬白雪のイメージとは異なる。

白雪は基本的に、他人に興味を示さない。

そんな白雪が側にいることを許可した人間は、隆人の知る限り自分しかない。

中学時代、人手が足りないから自分を生徒会へ誘ってきたことも、不思議といえはその通りだ。

さつきあれほど冷淡に他校生徒の告白を切って捨てた白雪が、意地だけで、好意のない相手にここまでさせるだろうか？

（まさか白雪のヤツ。実は俺のことが好きで、もう一度自分の側に置くためにここへ――）

ドクドクと心臓しんぞうの鼓動が早まり、隆人の鼓膜を打つ。

スローモーションで近づいた隆人の指先が、白雪の胸元に限りなく接近したそのとき、

「はわっ……先生！　なんとかしてくださいつ！　このままじゃ天文部が廃部になっちゃういますう……！」

今まで顔を真っ赤にしてふたりの戦いを眺ながめていた一年生部員の愛河真名が、目の前の光景に耐えられなくな

って叫ぶ。

がしがしと突っ伏した教師の背を揺すり、引き起こした。

「……ッ!？」

それを見た隆人と白雪は、瞬時にハッと我に返る。

確かに、校内での不純異性交遊は停学または退学処分の案件である。

考えてみれば当然の事態に、ふたりは冷静さを取り戻した。

「じよ、冗談もこの辺にしておきましょうか。わたしが先輩如きごとに胸を揉ませるなんてあり得ませんしね」

「あ、ああ……、悪ふざけが過ぎたな。後輩部員を驚か

せてしまったみたいだ」

隆人と白雪は素早くアイコンタクトを取り、さわやかに事態の収拾を^は図る。

真名という第三勢力の介入により、放課後の天文部は、平穏を取り戻しつつあった。

（でも、本当に白雪は俺に好意を持っているのか？ もしかして）

淡い、甘酸っぱい期待が、隆人の胸にじわりと生まれる。

仮に隆人の願望めいた予測が事実であれば。

すなわち、白雪が自分を好きなのであれば――、先日フラれて暗黒に叩き落とされた隆人の学園生活は明る

いものになるだろう。

なにせ、これほど可愛^{かわい}い年下の彼女ができるのだから。

「はあ……。よかったです。なににも起こらなくて……」

真名という少女はよほど初^{はつ}心^ぶなのか、あるいは天文部の行く末を真剣に案じていたのか、安堵^{あんど}に胸をなで下ろしていた。

（しかし――）

その年代の平均値を軽く上回るFカップを見て、隆人の中で改めて疑問が生まれる。

（白雪のサイズは、実のところどうだったんだ？）

さりげなく視線をそらしたつもりだが、隣の白雪にはバレたようだ。

「ふふ。せ、先輩はわたしの胸が気になっ
て仕方ないよ
うですね。せつかくです
ので気を持たせておきま
し
う」

若干声を上擦らせつつも、白雪は満足げな笑みを浮かべ、軽く目を伏せる。

が、次の瞬間。思いもよらぬ出来事が起きた。
むにゅん。

「えっ……？」

白雪の背後から、今まで寝ていた女教師の両手が伸び、ブレザーを押し上げる二つの膨らみを揉みしだいたのである。

「お、この感触はパッドじゃないな。ブレザーと下着の



せいでわかりづらいが、サイズはおそらく――」

「か」

――――！
なに考えてるんですかばかですかっ

ば
か
ば
か
ば
か


――

！

「」

先ほどもで強者の佇まいで部室に君臨していた白雪が、顔を真っ赤にして表情を崩す。

涙目で子供みたいな声を上げると、顧問教師の手を振り払い、ダッシュで天文部を出て行った。



その場に残された隆人と真名は、突然の状況に□を開けて固まるしかなかった。

「まったく、部室で騒ぐな……。子供かお前らは、ぐっ

すり寝られんだろうが」

いえ、子供ですけど……。

——っていうか、やってることはあなたの方が子供ですが。

そう反論したいのは山々だったが、隆人は言葉を呑み込んだ。

どうやら、白雪はパッドを使って増量してはいなかったようである。

それを知ることができたのは、隆人にとって貴重な収穫と言えなくもなかったが。

「ところで、あなたは——」

今まで顔を伏せていたために気づかなかったが、教師

はやや癖のある長髪が特徴の美女だった。

「おう、私は天文部顧問の倉敷朱音だ。くらしきあかねところでさっきの白雪のサイズだが——触った私の所感でよければ聞かせてやろうか？」

「いえ……」

複雑な表情で固まったまま隆人は即答。

興味が無いと言えば嘘になるが、あれほど恥ずかしがられると、さすがに白雪に対し悪い気がしてしまう。

あんな顔もできたのか、白雪は……。

隆人はそう思った。

「なんだよー、食いつけよー。年頃の男子高校生なら知りたいだろー？ ああん？」

ニマニマと、教師にあるまじき邪惡な笑みで、倉敷朱音が食い下がる。

「そ、そういうのはよくないと思いますっ……」

一方、よほど倉敷女史の蛮行ばんこうがショックだったのか、壁の端まで避難していた愛河真名は、恐る恐る異議を申し立てた。

「気をつけろよお愛河。この年頃の男とふたりきりになつたら、なにをされるかわからんぞ」

「ひっ！ た、助けてくださいいいいいい！」

「ちよっ……！」

隆人は慌あわてて誤解だと告げようとする。

が、涙目になった愛河真名は、脱兎だつとの如く部室から逃

げ出していた。

「……………」

ひとり残された隆人が、かかしのように突っ立っていると、

「ははは。気にすんな。あいつは恥ずかしがりなんだよ。月ノ瀬のヤツとは違った意味でな」

更に調子が出てきたのか、なれなれしく教師は肩に手を乗せてくる。

（いや、あんたに気にするなっって言われても——）

一応は美人に属する顔立ちをしているので、嬉しいスキャンシップと言えなくもなかったが、現状は困惑しかない。

「まあでも、卒業後の社会生活ではちよつと困るからな。今のうちから慣らしておかんな」

「逆に心に深手を負ってるような気がしましたが……？」

などと突っ込んだところで、彼女の方はどこ吹く風である。

少なくともこの天文部が、星詠^{ほしよみ}学園の中でも一際特異な空間であることは、隆人にも十分に把握できた。

そしてもうひとつ。

白雪が隆人に対し、特別な感情を抱いているかもしれないという謎が生まれた。

「ところでお前さ。うちの部になんの用があつて来たん

だ？」

「——俺が……、聞きたいですっ」
全てをひっかき回した張本人の問いかけに、隆人はそ
う応えるしかなかった。

——『非』恋愛脳才女の恋心には、まだまだ気づく
余地はない。

「試読版 白雪編」はここまで。続きは3月15日発売の本編でお楽しみ
ください。

※試読版に調整を加えておりますので、本編とは異なる点がございます。あらかじめご了承ください。